

ガウ—チベットデザインの小宇宙 —ヒマラヤにみるデザインと工芸の文化—

研究ノート：服部等作

1. はじめに

世界の屋根と比喻されヒマラヤは、溪谷や集落毎に少数民族の伝統文化が残る。なかでも古代より地理歴史的に様々な影響を及ぼしてきた少数民族チベット人独自の世界観にもとづく造形（建築・彫刻・絵画・工芸美術・経典）と表現（音楽・芸能、声明、巡礼）の文化が特徴的である。本稿は、お守りと装身具を兼ね備えた「ガウ」とよぶ金属工芸品の独自の造形文化について述べる。

私たち科学研究班による4年に及ぶ現地調査は、青海省・西寧市から西藏自治区のラサをむすび、その間に經由する東チベットのアムド地方（青海省東部と甘肅省の一部）カム地方（雲南、四川、青海省南部の一部）、ヒマラヤ北縁部の古代の吐蕃古道沿いの悪路と過酷な山岳高地を巡る行程である [1]。

図1にチベット人の居住文化圏を示す。チベットの文化は、ヒマラヤの立ちはだかる高山と青蔵大高原、大溪谷をなす大河、政治的境界線と関係なく一大文化圏を形成している。

調査の間は、訪問各地の見事な自然と多様な民族文化に触れる事ができる [2]。一方で国家的な西部地域の大開発事業を象徴する2006年7月に北京-ラサを直結する青蔵鉄道の全線開通は、孤立していた辺境地が発展すると共に地域の伝統文化が一層変容した。中国の辺境各地は、2000年の第10次国土開発以降、西部大開発の波が押し寄せ、その結果チベットが文化的な変容、衰退、俗化、さらにはその一部の消滅が進んでいく事が容易に予想できるのである [3]。

こうした伝統文化に押し寄せる近代化の著しい進展は、日本が戦後の経済発展の時代に経済優先を採用したのと同じ状況であり、今後の経済発展にともなう民族の伝統文化の衰退が懸念される。我が国の場合、2006年6月に「保護国際協力法」を立法化し文化財保護にかかわる国として国際的協力と推進体制ができ本格的な国際貢献が可能となってきた。今後、各地の民族固有のデザイン文化の研究を通じ我が国の国際貢献が益々重要となっている。

1. ガウとは

ガウ（Tb・チベット呼称・Ga'u、中国名・嘎烏）は、チベット人が身に付けるお守り（Tb・ten (rten)、amulet、talisman、ten (rten)）で紙に刷った祈祷文や小さな護符など聖なるものを納めるお守り箱（amulet box）である。身に付ける美しく飾った（荘厳する）容器であり装身具の役目も備えているため護身具



【図1】チベット人の文化圏

(runga (srung ba)、あるいは図2.2の女性をかざる rung ba (srung ba) の装身具と異なる。

大きさは、精々数センチの小型で持ち歩き用のから一般家庭の仏間用、寺院の荘厳用の数十センチの大型のものまで多種多様である。最も一般的な形は、円や舟形や縁の鋭い円盤のものが男性用でお守りの巻紙を手首や首にかけ、旅行時にガウを身に付ける。女性用ガウは、身体を装飾する宝石の役目を果たすことから魔よけとして効力を発揮する護符やガウのどちらかが何らかの方法で装身具として付けていた。

ガウの作り方は、前面と後部をそれぞれ別に銅を鍛金する。前面は、仏龕を模した開口部を有する蓋であり、面全体に後述する蔵八宝 (Tb・bkr-sis・rtags-brgyad、(San)・astamangalya、manga1a - astaka) と呼ぶ八種類の文様を鍛金で造形し、時には毛彫、豪華なトルコ石、サンゴを象嵌した後に鍍金をする豪華のものもある。内容物を納めるだけの奥行きをもつ後蓋は、前と後をひもで結ぶ紐掛けを持つ。

ガウは、チベット文化の影響が及ぶ西チベット、ブータン、シッキム、ネパール、外モンゴル、さらには中央アジアにも及ぶ広いヒマラヤ文化圏とその周縁の各地域で貧富の差を問わず使われている。

写真2.1-3は、祭りのなか衣装とガウの身体装飾例を示す [4]。

写真2.1はアムド・青海省同仁県民族祭りにおけるガウ、図2.2がアムド・果格州のゴロク族、図2.3が玉樹州カンパ族少女のガウと装身具、図2.4は、雲南省藏族自治州チベット族の春節に



左から [写真 2.1] ガウの身荘嚴 (アムド・黄南藏族自治州同仁県の六月会)、[写真 2.2] ガウの身荘嚴 (アムド・果洛藏族自治州の民族祭り)
[写真 2.3] ガウの身荘嚴 (カム・青海省玉樹藏族自治州)、[写真 2.4] ガウの身荘嚴 (カム・雲南省迪慶藏族自治州徳欒県奔子欄郷)

行われる輪踊り（鋼庄 ゴジョ）のガウ例を示す [4]。それぞれ民族衣装とガウおよび装身具の装着例である。

ガウを身につけることは、チベット人としての証しでもあり、春節や収穫、結婚の祝い事で正装する時に、あるいは五体投地をくりかえし命がけでラサや聖地巡礼を果たす時のお守りとして使う。

ガウの中味は、信仰の支えになっている大乘仏教で畏れ多くかつ聖なる標章となる仏像や護法神、肖像、泥塑製の擦擦 (tsa tsa, clay plaques)、経文、紙の印刷物 (rung khor, srung 'khor)、祈祷文や祈祷図、ダライラマや活仏の写真を納める。信徒達は、他に衣服の小片、カタ (kata, ka tag) とよぶ帛製スカーフや食べ残し、偉大な人物が清めた土で作った擦擦、チベットの八吉祥文様の一つである吉祥格子 (rung dud, knots)、さらには効用あるとされる經典の印刷排水を固めた丸玉や高僧の遺灰を混ぜ作る小さな擦擦などガウの内容を様々な組み合わせで納める。こうした収容物の多くは、たいいてい僧侶や寺院から購入する。チベット人の常識に従えばお守りとして効果的な聖なる標章は、ガウとそのなかにおさめたお守りが身体に接触している必要があり、そしてラマ僧の祈祷、寺院への布施や供物なしでは、お守りとしての効果、効力がないのである。

3. ガウの起源

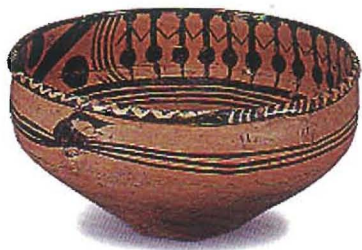
チベット工芸の粋を形成するガウの由来は、現在ははっきりとしていない。図 3.1-3 に古代人が装飾品を用いて祭祀する考古資料を示し、ガウ誕生のヒントとなるものをとりあげる。

次にあげる資料は、ヒマラヤの東北縁に位置する青海省東部のアムド地方および雲南省北部のカム地方からの古代人の装飾文化を伝える出土品である。現在チベット各地で伝統の芸能や祭りのガウと同様の装飾性にガウの淵源となる基本の造形と表現のイメージが共通する。

写真 3.1 に甘肅・仰詔文化期から出土の舞踏紋彩陶盆を示す。

舞踏紋彩陶盆（青海省大通県上孫家寨遺跡出土）は、先住民族の人々が手をつなぎ踊る様子から新石器時代の舞踏と祭祀場面とされ、神に奉ずる祭りが重要であった事が伝わってくる。

図 3.2-3 は、雲南に栄えた古代滇国時代（紀元 1 世紀頃）の装飾品で祭祀に用いた銅鼓を使いその上に四人が舞踏する意匠および円形舞人玉象嵌銅鈕飾である [5]。それぞれの人物像は、頭部と身体の装飾がわかり、なかでも胸から腹部にかけての装身具、耳飾りは今日の伝統的なチベットの装身具と共通する。この他に古代遊牧民の動物闘争文をあしらった胸元をかざる青銅製装飾品から古代のガウのイメージが得られる。古代にあってヒマラヤの



左から、[写真 3.1] 舞踏紋彩陶盆 (青海省・大通県上孫家寨遺跡・新石器時代)、[写真 3.2] 四舞踏銅鼓 (雲南省・江川李家山遺跡・滇国・後漢時代)、
[写真 3.3] 八人舞銅鈕飾 (雲南省・普寧石寨山遺跡・滇国・後漢時代)、[写真 3.4] 宮廷服とガウの装着例 (リチャドソン撮影・1946 年)

超自然を支配する圧倒的な自然の脅威と自然界の魑魅魍魎の神霊から邑に住む人々や一族を守るための神に奉ずる舞踏の姿のなかにガウや古代の身体の装飾文化の源流があったのであろうか、春節の輪踊りでガウを身体に荘嚴する例は、古代・滇国の祭祀の場面を思い起こさせ、さらにその輪踊りが、舞踏紋彩陶盆、円形舞人玉象嵌銅鈿飾の図像が今日でも連綿と伝統化し今も続いている事がわかる。

インドでいわゆる釈迦牟尼仏陀が布教を始めた原始仏教が後に吐蕃王・ソングエンガンポ (Srong-brstan-Ssgam-po) 治世 640 年頃時代にチベットの地に伝わった。仏教を国教化した時は、依然として自然や精霊の存在が不可欠で聖なるものであった。在家仏教徒は、土着の精霊信仰 (animistic) にもとづく古い信仰形態を残す梵教 (ボン) の一部も、引き続き受け入れたのである。そのなかで仏教のパンテオン (万神殿) の中核として宗教の伝統にあるお守りをはじめ、岩、山、地面、空に住む魂、精霊、悪魔への信仰を古い形態を残し今日も引き継がれている。

ガウがもたらされた最初の可能性は、紀元後から 5 世紀まで西北インド (現在のアフガニスタンからパキスタン北西辺境州) そしてインドで仏像の造形表現が始まった後にグプタ時代に密教化がすすむなかインドの伝統的なお守りと装身具としての円筒形の容器の伝統である。

仏教文化の物と心の強い影響から 8～12 世紀にかけ蓋然性としてガウがインドから伝った点である。例えばヒマラヤ山脈を越えインドとの危険な旅で、インドの僧侶とチベットの弟子が経典そのもの以外に護身用にお守りを所持していた可能性である。

図 4.1-3 に仏教美術で表現された身体の荘嚴例を示す。

まず図 4.1-2 に示すシルクロード沿いの古代ガンダーラ地方出

土の菩薩像の胸元に経典あるいは護符入れとされる円筒形容器の表現があり、同じ形態を有する黄金製容器が出土している。

写真 4.3 に多臂ターラ菩薩座像 (10 世紀後半のナーランダ出土) の身荘嚴例を示す。

ガウは、仏教あるいは梵教の信仰者は、共に霊的な危機から守るためにガウを身に付け始めたとされる。初期吐蕃時代の 7 世紀頃のチベットにお守りの習慣が既に入っていたとされる。

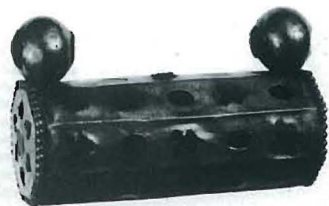
ガウまたは 11-12 世紀の身体装飾品の粗形がチベットに運ばれた証拠は不明であるが、類似形態のモノが西チベットで 20 世紀まで使われていた。実際に吐蕃王の宮廷服とガウを装着し当時を再現した光景を 20 世紀半ばに撮影したのがある。古代のガウについて残る証拠を以下にとりあげる。

写真 4.4 に錦製の袋を示す。

中国青海省の都蘭吐蕃墓群 3 号墓出土なる 8、9 世紀頃の錦製の袋がある [6]。出土した古墳は盗掘にあっており、死者を葬送するための道符が同じ墓から出土したが、錦製の袋にあったかは不明であるものの本来袋にお守りや護符を納めていた蓋然性がある。

お守りや魔よけの実例を二、三例あげると中央アジアのソグディアからの影響を持つ木製舍利容器用の鍍銀製装飾板が北東チベットの 8～9 世紀の墓から発掘され、同じ地域から円の中心に縛られた悪魔を描く曼荼羅図が出ている。

魔よけの類い (protective charm) は、今もチベットで家の軒先を飾る牛やラクダの頭蓋骨を飾る習慣がある。8 世紀半～9 世紀半ば頃に始まったものとされ、今日のガウの中に入れてお守りと類似する [7]。この時代には金や銀の箔板、紙、織物、樺の木にこの種の絵を描き小さな木製や金属製容器に入れたお守りを持ち



左から、[写真 4.1] 菩薩座像 (ガンダーラ、2 世紀、パトナ博蔵)、[写真 4.2] 菩薩胸像の経文筒護符 (タキシラ出土、2 世紀)、[写真 4.3] タラ菩薩座像 (ナーランダ出土、11 世紀頃)、[写真 4.4] 錦製囊袋 (都蘭吐蕃墓出土・唐・8 世紀半)

運んでいたようで、同様のものがネパールに今も現存している。

ガウとともにお守り、護符類は、少なくとも8世紀から登場する円や縁の鋭い円盤、紙に描かれた rung khor (srung khor) である。

写真4.5に小型ガウの例を示す。古代のガウとされ直径2～4cmの円形小型品が方形や長方形のもので伝わっている。現在古代のものとしてされているが、吐蕃時代とする確証がないことから7～14世紀頃に始まった品と考えられている[8]。

写真4.6に梵文「随求陀羅尼」を示す。

河南省洛陽郊外から出土した図の梵文「^{ずいぐだらに}随求陀羅尼」は、サンスクリットと関連する図像とを1枚の紙に墨刷している[9]。中央に随求陀羅尼と同じ効力をもつ大随求菩薩を大きく描く。その周りは、円形と方形状に陀羅尼を記し図像を配置する。大随求菩薩の力を象徴する持物は、右手の上から斧、火炎宝珠、宝剣、梵篋、左手の上より三鈷杵、宝輪、戟、蓮華である。随求陀羅尼は、これを書写して身につければ比類ない効果が得られると説かれ罪障や病の消滅あるいは福德招来など諸願の実現に力があるとされる呪文の類で唐代(618-907年)以降の信仰である。末尾墨書から報国寺の僧の発願で天成元年(926年)に刷られ当初小さく折り畳んでガウや袋に納めお守りとした事がわかる。この稀少な版本の例は、その図像が平安時代(794-1192年)の曼荼羅に通じる関連性も注目できる。

他に甘肅省敦煌莫高窟から吐蕃期(787～866年)の個人用お守りが近年発見されている。チベット文字で書かれた木製容器を皮で覆い保護用に包む紙片からなる。他に吐蕃期初期の鍍銅製の舍利容器の個人用ガウも少ないがある。それは、鉢物の雷鉄・thokche (thog lcags) と呼ぶ野や山にある一種で、チベット人

は稲妻が地表を打つ時に生成され、守護する力が備わっていると信じている。大部分が装飾板の形をもち、それ自体が護符の装身具となっている。

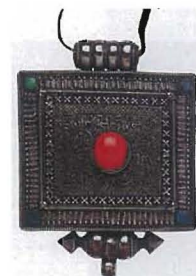
写真5.1にトルコ石、写真5.2に珊瑚を象嵌したガウを示す[10]。

近年まで高級官僚が新年儀式に身につけていた大きなトルコ石を象嵌した鍍金製のガウは、正に吐蕃王達の装身具の ringyen (ring rgyan) の一部、または後世の複製品のどちらかと考えられる。こうしたガウや装身具をつける習慣は、ダライラマ5世(ガワン・ロサン・ギャンツウオ Ta-la' i bla-ma 1617～1682年)が紹介し、7～9世紀の吐蕃王達の宗教的な力と、5世自身の非宗教的と(政治)宗教的な二つの力の継承を意図する儀式の一環とみられる。5世は、ポタラ宮殿で元旦のみ宝蔵庫から出す宝物を独占しチベット古代の吐蕃王達の栄光を再現することで自己の力を正当化したのである[11]。

ポタラ宮殿の宝物については、近年チベットの文献で宮殿の宝蔵庫の品であるこの種の儀式用のガウをとりあげ、その一部が17世紀に作り直された点やチベットの外に持ちだされた点を述べている。儀式用のガウは、7～9世紀の金工芸品の様式的特徴がないが17世紀の終わり頃(5世の治世期間にあたる)作とされる宝石と一致する。良い例は、5世、7世(1708～1757年)、8世(1758～1804年)の仏塔(壺塔、stupa, chortens)の仏龕前面に見ることが出来る[11]。

ガウの文献資料は、少なくとも11世紀のチベットに遡るお守り箱が貴重な聖なるモノとしてチベットの文化圏に広く波及していた事を暗示する。

歴代藏王記は(註:王朝時代(royal period)、1347年の Gyalpo khangyig の編纂と推定)、宇宙をガウ(karchar)に例え、



左から、[写真4.5] 随求陀羅尼(洛陽出土・唐・天成元年(926))、[写真4.6] 小型ガウ、[写真5.1] ガウ(トルコ石・珊瑚象嵌)、[写真5.2] ガウ(アムド地方、珊瑚象嵌)

天と遭遇し作られる閉じられた箱 (Nam) を地球 (Sa) とする。

ガウのイメージは、大乘仏教の基礎的教義である般若経 (Prajnaparamita) に登場し、最も早い梵語訳が9～11世紀にある。サンスクリット語の sampu Ta は、ガウ (karchar) と同義語で、多分に梵語にも使うようになったとされる。

チベット仏教の一派閥であるカギュ派 (Shangpa Kagyupa) の11世紀文書、Changchen gauma は、お守り箱が別部品の様に切り離せない物で、至福と空の瞑想で光明を悟ると記す。実際その名前は創始者 Khungpo naljor の信仰が発端となっている。Khungpo naljor は、教示の価値を認め、紙に書いて、ハート形のネパールのガウに入れ常に身につけて持ち歩いたとされ、ネパールでは、ハート形をした特徴的なお守り箱が19世紀半頃まで使われ続けていた事は興味深い。

ハート形をした特徴的なネパールのガウと同じ形態で [12]、ネパールの金工師は、チベット人用に純粹のチベット式ガウを作り伝えるが、ネパール独特のお守り型を、チベット人が時々身につけたという可能性を示している [12]。

ヒマラヤは、閉ざされた地域であると同時に四方からチベットへの交易ルートが古くから開かれきた。北西インド、カシミール～西チベット、タリム盆地のホータン、その後控える天山南路の南道、北道では、珊瑚、トルコ石などの宝石をはじめあらゆる生活物資と特産品の輸出入の交易路があり現在に至る。ガウは、チベット大乘仏教とともに交易のかかわりで永く影響を及ぼしてきたのである。

写真 5.3 に鉄製のガウを示す。

インドのラダック地方アルチにある Sun tsek 僧院の16世紀半ばの碑文は Fambudvipa (人が住む南の大陸を表すサンスクリッ

トの言葉) を「天と地の閉じられた箱」と例える。このアルチ碑文よりも前世紀に少数の高品質で象嵌細工をもつガウは、アルチ碑文よりも前世紀に存在する。それらはよく知られた15世紀初期の素晴らしい金と銀で象眼した儀式用の物 (明初期の永楽帝 (1403-1425) 頃から重要なチベットの宗教、非宗教を問わず人物への贈り物だった) と様式、特徴が共通する。これらの物は、緻密にちりばめられた渦巻き模様を代表的特徴に幾何学的な帯、蓮、雲の渦巻き模様である。それは渦巻き模様の中に置かれた蓮弁や永楽帝サインの螺旋の金の線の挿入で優美に装飾された長方形で鉄製のガウのようなもので、この時代に作られた外交上のより小さな贈答品かもしれない。別の渦巻き模様の中に小さな雲を描いている長方形で穴の開いた鉄のガウは、おそらく時代としては12世紀後のものである。鍍金製以外のガウと比較されるごく少数の鉄製ガウは、多くが金属に対する根強いチベットの文化的姿勢に関係しているかもしれない。チベットで鉄は、悪魔を追い払い打ちのめす儀式の両面に結び付けられた。その操作で使われる儀式用の利剣 (カドウガ) や刀 (phur bu) の刃は、鉄だけで使用するよう教義に規定される。新しい教派やゲルク派でも、また宗教用の物や儀式の器を作るために鉄の使用を禁じていた。このような種と関連し、鉄が幽霊や悪魔を追い払うのに優れた素材とされ、さらに平和な神、仏陀の眷族像には不適とされた。ガウがどんな素材で作られようと、仏陀の姿や宗教の装飾で面を飾ることで、それらお守り役目が高まるのである。

4. 男性用ガウ

ガウは、お守りや装身具として物への関心を満たすだけでなく地位の象徴、ある場合に官僚の序列や肩書きにも役目を果たす人



[写真 5.3] ガウ (鉄製)

気を保ってきた。ガウは、この点に関し男女共に正方形、長方形、円形のような形で窓なしのガウは、男女を問わず装身具に使える。しかし男女共用のガウがあるにもかかわらず、明らかに男性、女性向けの区別がある。

チベットで男性が身につけるガウはほとんどが、方形、長方形、あるいは円形である。最も好まれた形の一つは、仏教のチャイティア（僧堂）の屋根の形、上端に頭頂をもつ形態を持つ容器で底と裏面は平らである、それらは、中央アジアでガウdawang、またはdre pangと呼ぶ。サイズは高さ2～3cmから35cm以上まで極端である。高さ10cm位までのこの種の箱は、首にかける。大きい寸法のは、革や布紐を用いて、左肩から胸から右腕下に掛け、普通は、体の右側の胸や腕の下に掛けられた。東チベットにおけるこのタイプの男性用箱ガウの名前は、「腕の下で運ぶ」という意味をもつchagap (pyag rgab)、で、それらも背中やウエストの紐から掛けられた。

女性用のガウのようにデザインの主流は、両側面についている取り付け紐が上下よりもむしろ多い。男性用ガウは3つの部品からなる丸い管状のヒンジで構成した環を使い運ばれた。大型の男性用ガウは、両側面に環があり、後ろに一枚の差し込み式の裏板がある。男性にとって、特に伝統的なチベットの貴族にとって、大型のガウは、鎧や銃、剣と共に地位の象徴であり、この種のは、装飾が贅沢で高価な材料と製作費をかけている。僧院長や高い地位にある人物が、貴族と同じように贅沢品を依頼したということは驚くべき事である。反対に一般僧、尼僧は、質素とはかぎらないが小型のガウを身につけていた。大型のガウは、日常の装身具の意図がなく長旅のお守りであった。南や中央チベットで高い地位の僧侶はもともと4、5個のガウを旅行中に侍従に持たせ運ん

でいた。休憩の間にそれらは、一列に置かれて仮祭壇の役目を果たしていた。これらのガウは、僧侶が寺に帰ってきた際に僧の個人の部屋の祭壇に置かれた。東チベットのアムドの遊牧民と僧は、時にガウを腰の周りに納めて運ぶ。彼らの好む型は、宝石や底が狭く肩のところで広がっており、なめらかにだんだん細くなっている蓮弁 nor bu 型の形を好んだ。在家信者もガウを旅行で使わないときには、家の祭壇に大事に置いている。

5. 文様と装飾

写真 5.4 にガウと藏八宝文様を表現するガウ示す。

ガウで最も人気のあるモチーフが、仏教に関連した藏八宝とよぶ吉祥文様の組み合わせである。強い守護の役割を持ちしばしばガウ前面に浮彫や象嵌がある。それらは、身に付ける者にとって明らかに護身に縁起がよいが、人々は、ガウ内部にも供え物をする。この供え物は、「五感のシンボル (The Five Sense Symbol)」、dod yon nya (dod yon lnya) と関連性が明らかで、普通にガウの中央窓の下に見られ、視覚 (鏡)、触覚 (布)、嗅覚 (お香)、味覚 (食物、しばしば果物)、聴覚 (シンバルかホルン) から成り立つ。それらは、平和な内在する神や女神に対する断念や崇拝の表現として供えられ、また祭壇の主な像の下に似たような供え物が置かれる事を思い起こさせる。五感の世界が人に入る入口を表象するので、このように象徴的に神々に提供された人の肉体的、精神的性質も表している。

富や内の神への貴重な贈り物を象徴する宝石は、しばしばガウの中央の隙間の周りで見られるか、開口の下のボウルの中に集められている。ガウに最も頻繁に見られる配置として希望をもたらす宝石は、yidzhin norbu (底で結合し、まわりを枠で囲まれた



[写真 5.4] 藏八宝文様を表現するガウ

6個か9個の宝石で構成される)がある。この全ての宝石の由来は、古代インドにおいて世界の支配者や転輪聖王の紋章の一つで「王の権力の7つの宝石 Seven Jewels of Royal Power」である。仏教教典では、世界を支配する王の力と富の象徴は、全ての願望を精神的—物質的両面で満たす神の比喩であり、チベット仏教を信仰する人々のレベルでは、両面を求めることは必ずしも矛盾しない。

ガウで表現する代表的な標章は、八吉祥文(The Eight Auspicious Emblems)やtashi tagyeである。チベット世界で最もよく普及しているそれらは、原始仏教の象徴文様から姿を変え新たな意味を与えられた仏教徒やジャイナ教の王族の象徴として発展したとみられる。各文様が仏教への篤い信仰から個人の精神的充実と守護の力の両面を象徴するようになり、それらは、偉大な菩薩や仏陀による曼陀羅の宇宙世界を表すこともあった。

インドの仏教文典にも言及のある八吉祥は、インド初期の芸術を表す物ではない。最初に出現した現存する組み合わせの中には、9世紀後期と10世紀の初め敦煌の仏教壁画や帛画がある。また中国の紋章と装飾文様で、大量の中国帛の複製、貿易や中国からの贈り物としてチベットに輸入された錦織の織物もあるとみられる。このような図像の借用の中には、竜の柄をもつ礼服でおなじみの下裾飾りに山、海、雲の文様デザインがある。それらは、ガウを含めチベット装飾美術の多くの背景表現、例えば天空神話の中心のメール山(須弥山)を表している。メール山は仏教三千世界の中心にあり、取り囲んでいる山々を越えて、世界の大陸が置かれている巨大な大洋がある。

チベットでdzi bar、または、tsipatar (rtsis pa ta)と呼ばれる怪物の仮面は、インドの栄光ある「獅子咬み(kirttimukha)」に

由来している。シバ神の影響が寺院の戸口と宗教的な像において見られる。チベットとネパールで、似たような獅子面がガウの開口部の上か下に頻繁に見られ、ガウの中の神々とその携帯者の両方を守っている[13]。

チベットで怪物の最もありふれた形は、獅子咬み、インド半島の天空の鷲、およびガルダ(garuda)を組み合わせたものである。最も目立つのは、怪物の頭、退化した羽、蛇や木の葉を挿んだ2本の腕の上に置かれている太陽と月のシンボル、nyi da (nyizla)がインドの脈絡で獅子咬みが加っていることである。チベットでは、特にガルダを採用し、その伝統的な敵である蛇、水の精(iu (klu)によって起こる病気を防衛するとされる。

註：

- 1： 文部科学省科学研究費補助金・西藏自治区—青海省を結ぶ藏族の工芸美術と芸能の文化、その資料と保存に関する研究（平 15～18 年）、チベット仏画制作センターにおける伝統技法用法と継承に関する研究（平 16～19 年）、ならびに学術振興会・日英科学共同研究国際学術調査（平 13～15 年）によるものである。
- 2： 服部等作：ポラタ宮を中心としたヒマラヤ文化圏とその文化伝播、アジア遊学、43pp.8-27, 勉誠出版,2002
- 3： 服部等作：ヒマラヤの文化圏とチベット文化、2002 年 9 月 13-14,ITS2002 KYOTO 国際チベット研究シンポジウム・チベットの芸術と文化—その現在と未来、ITS2002 論文資料集、広島市立大学、2004 4：服部等作：東チベットからラサにいたる旧吐蕃古道沿いアムドの六月会の祭り文化、ACCU ニュース No.357、ユネスコアジア文化センター、UNESCO、2006
- 5： 張増棋主編：滇国青銅芸術・雲南民族美術全集、雲南人民出版社、2000
- 6： 北京大学考古文博学院、青海省文物考古研究所：都蘭吐蕃墓、図 27.45.1-2, 科学出版社、2005
- 7： 西藏自治区文物局、四川大学考古系、陝西考古研究所編：青蔵鉄路西蔵段田野考古報告、図版 50、察秀塘四号祭祀遺跡出土、科学出版社、2005
- 8： 林東廣：西藏古文物 - 天鐵及藏印、藏傳佛教文物、2003
- 9： 東京国立博物館：中国国宝展、図版 136、東京国立博物館、2004、
- 10： Clarke,J.：Jewellery of Tibet and the Himalayas、V & A publications,2004、
- 11： Clarke,J.：Ga'u-The Tibetan Amulet Box,Arts of Asia, May-July,London, 2001
- 12： Jane Casey Singer：Gold Jewelry from Tibet and Nepal. Thames & Hudson,1996
- 13： スネルグローブ、奥山直司訳：チベット文化史 pp.28—29、春秋社、2004